Ｔグループ（人間関係トレーニング）

-深いかかわりから学ぶ-

日本の各地から集まったさまざまな人々と 八ケ岳を目の前に仰ぐ清里の豊かな自然は あなたが,人と人との関わりを探究するのを 豊かにささえてくれるでしょう。

-本当の自分自身でいられることの深い充足感
-人と人が関わるプロセスの変化に富んだ姿
-対話の中で人の心に触れた瞬間の感動
-深いところで自己と対面した驚き
-ズッシリとした学びの手応え

担当者	中村和彦（南山大学人文学部心理人間学科教授） 楠本和彦（南山大学人文学部心理人間学科教授） 植平　修（植平工業株式会社　代表取締役会長） 文珠紀久野（山梨県立大学名誉教授・特任教授）
概要	人間関係の体験学習の中でも、特に密度の濃い体験のできるトレーニングが「Ｔグループ」とよばれる集中的集団体験です。その中から、深く豊かな気づきや学びが生まれます。 　10名程度が１グループになって、自由な雰囲気の中で対話を続けていくと、自己理解や他者理解、受容や共感、傾聴や援助関係、コミュニケーションやグループプロセス、などにかかわる様々な現象が起こります。その時その場に起こっている人間関係や自分や他者のありようについて、気づいたことや感じたことをお互いにフィードバックしあうことによって、生の人間関係から学ぶことが可能になるのです。 　Ｔグループに代表されるラボラトリー方式の体験学習に参加し学ぶことを通して、現代社会の中に信頼の風土や人と人とのつながりを創り出す変革推進体（change agent）として、人々とともに生きられるようになることが期待されています。 ●Tグループについて Ｔグループとは、Training　Groupの略であり、人間関係トレーニングの原点かつ源であるトレーニング方法です。具体的には、メンバー7～10人とスタッフ2人が1つのグループを組み、同じグループで１週間を過ごしていく中で生じる人間関係自体を題材にしながら、ともに学びともに成長することに取り組むトレーニングです。 歴史：Ｔグループの始まりは1946年、グループダイナミックス研究者として有名なＫ．レヴィンを中心とした研究者たちが開いたワークショップでした。その後、アメリカ合衆国ＮＴＬ（National Training Laboratory）でＴグループが継続的に開催され、現在でも核（コア）プログラムとして実施されています（Human Interaction Laboratoryという名称で実施）。 日本には、1950年代後半に紹介され、立教大学キリスト教教育研究所（ＪＩＣＥ）によるヒューマン・リレーションズ・ラブとして実践が重ねられました。 南山大学人間関係研究センターでは、Ｔグループ本来の発想である「人間尊重」をベースとしたグループアプローチとして、前身である南山短期大学人間関係科時代から通算30年あまり、このＴグループを実施し続けています。 他のトレーニングとの違い： Ｔグループは、合宿制で行う集中型のトレーニングです。したがって、自分自身のあり方、対人関係の持ち方、グループダイナミックスについてなど、非常に深く学ぶことができます。6日間という長いプログラムで実施するため、他のメンバーとも深い関わりができ、そこから深い気づきを得ることができます。また、ふりかえりの時間が充実しているのも特徴となっています。
日程	2018年3月8日（金）～3月13日（水）　5泊6日 フォローアップ：2019年7月28日（日）予定 10：00～16：00（南山大学　D棟）
定員	18名
会場	（財）KEEP協会・清泉寮　　〒407-0301　山梨県北杜市高根町清里3545
受講料	受講料　84,000円〈税込〉 滞在費　59,400円〈税込〉予定（ツイン利用、宿泊・食事含む） ※現地徴収
メルマガ 講座報告	コーディネーター　楠本和彦　記 「第30回人間関係トレーニング－Ｔグループ－」が、2018年3月8日～13日（5泊6日）の日程で、清里清泉寮にて、開催されました。 参加者は18名。スタッフは5名でした。 　講座終了後に記入していただいたアンケートによると、多くの参加者の方が、この講座の学びについて、高い満足感や意味深さを感じられていることがわかります。 学びや気づきの内容として、 ・新たな自分・自分の枠組みの発見 ・今ここに対する感度 ・心と言葉をつなぐ大切さ ・多様な人々が関わりあい ・違いを乗り越えて、創造していくプロセス ・我－汝の大切さ ・自分と共に居てくれる仲間のありがたさ など、人間関係における重要で、貴重な言葉が挙げられています。 スタッフにとっても、貴重な学びの場でした。 　私は、人が真実に生きようとして、お互いに関係をつむいでいく時や場で 生まれるものが、いかに厳粛で、歓び多いものかと深く感じることができま した。 　今回のラボラトリーに集ったすべての方への感謝の念を記し、この報告を終えたいと思います。本当にありがとうございました。